2009年度 修了

知的障害者施設におけるボディワークの試み
― 他者と触れ合うということを通して ―

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
岩越　徹也

本研究は、知的障害者施設で身体に触れ合うというシンプルなボディワークを行うことで、重度の知的障害者と施設職員にどのような変化があったかを考察した。重度の知的障害者に対する援助は、言語でのコミュニケーションが難しく、そのため援助の効果がなかなか分かりづらい。障害者と援助者の関係も、「～をしてあげる」という一方的な関係に陥りやすい。そのような関係は、最悪の場合は身体拘束やネグレクトなどの虐待に繋がる危険性があり、援助する側も誇りや専門性を感じられず、バーンアウトに陥る危険性がある。実際、福祉の現場では職員の離職率は高く、知的障害者の施設では虐待の問題も絶えず起こっている。援助者と障害者が同じ人間として触れ合い、援助者、被援助者という垣根を取り払った体験が必要であると思われる。

ボディワークは月に1回、午前と午後の2回に分けて、二つのグループで行われた。午前のグループは身体障害と知的障害を重複した方のグループであり、言葉の理解はあるが、麻痺等のため自ら言葉を発することが難しい方を対象とした。午後のグループは最重度の知的障害を持ち、自閉傾向が高く、言葉でのコミュニケーションをほとんど取ることができない方を対象とした。筆者はボディワーク講師のアシスタントとしてボディワークの参与観察を行った。ボディワークには、講師、アシスタントとともに、グループを担当している施設職員も一緒に参加している。職員に対するインタビューは、午前のグループ担当2名、午後のグループ担当2名の計4名に対して行った。インタビューは半構造化インタビューで、一人に対して1時間程度のインタビューを行い、ボディワークの感想、利用者に対する気づきなどの聞き取りを行った。

ボディワークでの身体を使ったコミュニケーションは、そのシンプルさゆえに重度の知的障害者の方も楽しんで参加することができていた。また、身体を使った対等なコミュニケーションは職員にとっても、利用者に対する新しい気づきや自分自身の援助に対する気づきに繋がっていた。実際、施設ではボディワークからヒントを得た職員が、利用者とゆったりした関わりを持つためのプラグラム活動を施設に提案している。ボディワークは対象者を操作的に変化させるのではなく、身体を通して自分自身の気づきに繋げていくことを目的としている。援助者にとってボディワークの身体を通した人間対人間の関わりが、援助者と被援助者という関係を超えた「ともに生きる」という実感に繋がっていた。